

# 文部時報

第1133号

昭和46年11月

青少年と文化	大島 康正	2
▷座談会◁		
青少年の文化活動の現状と展望		11
(出席者) 林部 一二・栗原 一登・森 正		
友井唯起子・杉本義智夫(司会) 吉里 邦夫		
青少年と演劇	浅利 慶太	36
地方における青少年の文化活動	井上 武弘	41
青少年と文化財愛護	宮野 礼一	48
青少年芸術劇場の実施について	土生 武則	55
学校教育と芸術文化	赤木 慎平	61

~~~~~  
〔現地ルポ〕㉑

|               |       |    |
|---------------|-------|----|
| 県民オペラ・サークルの活動 | 田村 卓夫 | 68 |
|---------------|-------|----|

〔随想〕

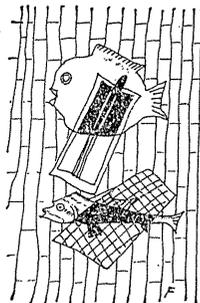
|          |       |    |
|----------|-------|----|
| 教え子のことなど | 伊藤 忠二 | 74 |
|----------|-------|----|

〔教育研究所紹介〕㉒

|           |       |    |
|-----------|-------|----|
| 長崎県立教育研究所 | 兼俣 恒治 | 78 |
|-----------|-------|----|

〔連載第42回〕

|                  |       |    |
|------------------|-------|----|
| 人物を中心とした広島県教育郷土史 | 吉久 繁一 | 85 |
|------------------|-------|----|



表紙 吉永房子

カット 須貝夫早子

# 青少年と演劇



浅利慶太

教育がまだ普及していなかった時代、つまり、大衆がまだ文字を

習い覚えていなくて、ろくに本も読めなかったころ、芝居は大衆教育の役割さえひきうけていました。このことは洋の東西を問わない歴史的事実です。しかし現在では状況が一変しています。文盲はわが国ではほとんど見あたりません。けれども、対象を一般大衆ではなくて青少年に限るならば、演劇の教育性にはなお注目之余地がおおいに残されています。その点をめぐって、いささか私見を述べたいと思います。

本題にはいる前に、隣接のジャンルと目される映画やテレビと、演劇との機能の違いについて一言しましょう。まず、だれでもすぐに気づくのは、前者がテクノロジーによるイメージを媒介手段としているのに対して、後者が俳優と観客との生身の交流によって成立しているということです。長い歴史を経て、演劇は幾多の変遷を重ねてきました。その過程を、演劇の形態に目を据えてながめると、

大きく三つの時代に分けることができます。

## (1) ▲みんなを感じるV芝居の時代

演劇の起源が、全地球のどの地点においても、宗教的あるいは呪術的な儀式によるものであることは衆知の事実です。舞台を観客が半円形にとりまいて行なわれた原始的形態の演劇は、民衆の心に培われている神々と人間との交流の劇であり、その劇を民衆の代表者としての俳優がこれを演じ、観る者も演ずる者も、ともに神聖な感動に陶酔したのでした。ギリシア劇や能には、なおその形が生きていると言えます。

## (2) ▲みんなに見せるV芝居の時代

この時代には、舞台と客席との区別が今日ほど明白ではなく、観客の一部は舞台上座って芝居を見ていましたが、演劇内容はすでに作者の独創によるところが大きくなって、民衆の共有物とは言えません。しかし、舞台と客席との交流はなお生き生きとしたもので

した。シェイクスピア劇や、全盛期の歌舞伎がそのいい例です。

## (3) ▲ひとりひとりのぞくV芝居の時代

第四の壁という有名な言葉があります。部屋の中の出来事のありのままをのぞかせようというのです。第四の壁がすなわち幕で、幕があがったあと、額縁にきられた部屋の中の生活が観客の目にさらけ出されるといわけです。額縁と幕とによって、舞台と客席とは完全に断ち切られ、座席もひとりひとりの個席に分れてしまいました。

この第三の時代の劇場形態がそのまま映画館につながり、現在に及んでいる現状です。しかし、映画と演劇との機能の違いを改めて顧みるとき、未来の劇場形態が舞台と客席との交流を生かす方向に変わってゆくであろうことは、いまや確言できます。現在なお、映画館と劇場の形態がきわめて似ているという事実や、同じ俳優が映画やテレビに出演したり、劇場で芝居したりすることや、またたとえば、同じ小説が映画化されたり、芝居に脚色されたりすることから、映画と演劇とは双生児の芸術のように思っている人々さえいます。しかし、本当は映画は演劇がその第三期に産み落した鬼子であり、そのテクノロジーとレアリスムにおいては産みの親をしのぐ力をもっているが、演劇には演劇としての全く別の機能が本来そなわっていることは、上述の歴史に照らしてみても明らかなのです。

このことを観客の立場から、もう一度考え直してみましよう。映画館の暗闇の中でスクリーンに目をこらしている観客は、まったく孤独な状態でイメージの流れに身をゆだねているのです。たとえ、

隣の席に両親や恋人が座っていても、その心理状態にほとんど変化はありません。これに比べて、本来の演劇では感動や笑いは、隣から隣へとまたたく間に伝播しあい、客席全体がひとつの大きな情感の流れに融けこむ状態が生じます。この対比から考えると、映画鑑賞の心理状態は、観劇よりもむしろ読書のそれに近いのです。スタンドの明かりの輪の中に、小説本をひろげて、活字を目で追いながら情感に浸っている状態にそれはそっくりなのです。そして、このことは茶の間のあるい電灯の下で見るとテレビの場合にも、やはりあてはまります。夕食のひとときが一家団樂のかけがえのない時間である欧米の有識階級の家では、食卓のある部屋に絶対にテレビを置こうとしないのはそのためです。Aながら病Vにかかっている一部の日本人は、家庭様式の違いもあって、そのことに比較的鈍感ですが、テレビの画面に夢中になったものには、すぐ隣の人の話しかける言葉さえ耳にはいらなくなる現象が生じることが、今ではだれでも始終経験しているのではないでしょう。映画でもテレビでも、スクリーン上に去来するイメージの流れは、音声と相まって、麻薬のように、観る者をしびれさせる力を持っているのです。

誤解のないように、おことわりしておきますが、映画、テレビと演劇の優劣を論議しているわけではありません。あくまで、その機能の違いだけを問題にしているのです。そのことによって、それぞれの機能を十分に生かせる方向も、おのずから明らかになると信じているからです。

ところで、舞台と客席との交流を、その本質的な機能とする演劇

と、わが国の青少年とのかかわり方という本題に、そろそろはいりましょう。まず、おおよっぱな現状分析から、新しい劇を常につくりだそうとしているという意味での「新劇」に話をしほってゆきますと、新劇の観客層がいぜんとして青少年にむしる主体があることは、いっぽうでは新劇の未熟を物語る証左であるとともに、他方ではそのあかるい未来を約束しているものと私は考えます。ここで、更に話をその「未熟さ」にしばりましょう。まず、新劇専従の劇場は、日本全土で東京に小さな俳優座劇場ただひとつしかないという有様です。これは「未熟さ」というよりも「未開」という方がむしろ当たっているかもしれません。つぎは作品、この点でも英米の「エイクスピア」、フランスのラシーヌ、モリエール、ソ連の「チェホフ」のような古典を新劇はもっていない。世阿弥や近松は、能の世阿弥であり、文楽や歌舞伎の近松であっても、新劇の世阿弥、近松ということはできない。更に、ソ連（更に具体的にはモスクワ芸術座）で、メーテルリンクの『青い鳥』や「エイクスピア」劇、ドイツで「エイクスピア」劇がそれぞれ古典の地位に定着して、常上演されるというような形で、わが国の新劇は、なおいまだ「チエホフも、シェイクスピアも、わがもの」とできないままの状態です。これは観客としての青少年のためには、たいへん遺憾なことであり、まずよい芝居、古典的な作品に接する機会を与えなければ、彼らの演劇感がいびつなものに歪む危険は非常に大きいのです。ただ幸か不幸か、貸小屋を点々としながら、昔ながらの河原者の、浮き草的興行形をとりつづけている新劇の舞台に、むしろ「ふりついでくる」青少年の数は、きわめて少なく、しかもその質は文学青年的か演劇青年的である

の高速化などによって、共通語が、ほとんど津々浦々にまで広まったこと。

(3) 民衆が公けの席でどんだん発言し、自己表現することを好むようになったこと。

(4) インドや中国の文化の影響下にあったときでさえ、能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎などの形で、インドや中国には、その先例さえ見られないような、世界演劇史上にも最高のピークを示す演劇遺産をつみあげてきた民族であること。

(5) 経済の成長ぶりが欧米に迫っていた状態にあるのに、劇団の経営状態は最零細企業にも劣る、三・四世紀以前の河原者の状態のままであること。したがって、例えば、地価が世界一高い東京の繁華街の近くに劇場を建てることはおろか、借りることさえ、夢のまた夢であること。

(6) 作家たちの中には劇作の才能を秘めた人々が数多くいると思われるのに、出版界と新劇界の、この経済のあまりの落差の大きさが禍いして、積極的に、更に欲をいえば、全身全霊をあげて劇作にとりくんでくれる人がきわめて少ないこと。

(7) 映画やテレビで生計をたてている俳優たちの潜在意識の中に、舞台で演じたいという、おそらく膨大なエネルギーが秘められていること。等々……

以上の各項にわたって、それぞれ詳しく説明をはじめたら、おそらく一、二冊の書物を書かなければならないような気持させますが、要するに私の直観的なイメージをたとえると、爆発寸前の

るため、このことはいっこう問題にならないですんでいるのです。また青少年以外の、成年、老年層の観客が新劇に定着しない理由がそのあたりにあることも明らかです。私は新劇をつくる立場にある人間のひとりとして、演劇史をひもときながら常に反省します。そして、コメディ・フランセーズも、モスクワ芸術座も、ペルリーナ・アンサンブルも、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーも、最初はつくる立場にある人々の独自の努力と、それを支えた観客たちの熱意が、伝統ある劇団と劇場と、更に作家を産みだし、やがて国家の援助の手がさしのべられて、今日の彼らの姿があることを知りぬいています。しかし、私はときどき、奇妙な白昼夢を見ます。現在の日本では、世界演劇史上に例を見ない現象が起こる可能性があるのではないか……ひとりの、あるいは何人かの勇氣ある政治家が、文化国家建設のために、現在のヨーロッパ各国の政府が演劇行政として使っているだけの予算を、思いきって、わが国の新劇に投ずるようにしむけてくれたなら、現在「未開」、あるいは「未開」の状態にある新劇が、にわかに成長、成熟を開始し、大輪の花を開き、豊かな実を結ぶのではないかと……甘い期待がすべて裏切られる新劇界に棲息するものとして、あくまで、これは白昼夢に過ぎないとは思ふものの、その理由はいくつかつきすくにもあげられるのです。

- (1) 明治百年、生活様式が一変し、言語までが大きな変容をとげ、ようやくその変転のテンポが欧米と一致しはじめたということ、これは演劇の繁栄する社会的土壌がようやく整ってきたことを意味します。
- (2) ラジオ、映画、テレビの急速な発達、電話の即時化、交通手段

エネルギーを貯えながら、地層が厚いために噴火口をさがしがあぐねている新生火山が、わが「新劇界」の真の姿であると言いたいのです。劇団が離合集散を重ねたり、騒動が絶えないのも、地下のマンホール対流の渦巻のように、私には見えます。

どうやら話が思わぬ方向に走りすぎてしまいました。しかし、青少年にも新劇にも、私が期待するのはその未来です。ましてや、青少年の未来を培う力、ことに全身で受けとる感動という形で心に「ヴィジョン」を焼きつける力を本来もつはずの演劇が、新劇の現状では、「青少年と演劇」という課題にまともな答えるのが恥しいほど微力しか發揮しえないのです。自分たちの手で、この閉塞状態をなんとかして突破しなければという使命感に燃えれば燃えるほど、現実の重圧を感じ、あせりいらだつのです。

そろそろ結論をまとめたと思うので、話を前に戻します。映画、テレビと演劇との機能の違い——映画やテレビは孤独で集中的な受容にすぐれ、演劇は心の交流にすぐれている。ことにテレビは、今後、情報伝達を、さまざまな技術教育の手段として、ますますそのすぐれた機能を發揮すべきだと私は考えています。しかしテレビでは一方的な受容に終始するという事実も認めなければなりません。家族友人と連れだつての観劇という古来からある人間の文化行動の現代的意義が、それからいって再検討されなければなりません。演劇は再演劇化することによって、舞台と客席との交流をますます強化するべきであり、自らの意志で一定の時間に一定の空間に集まって来た人々の魂を、ゆすぶる動かし、生きていることの感動を与えるという、演劇古来の機能を十二分に發揮すべきです。こ

とにまだしなやかな精神の持主である青少年には、たまさかの観劇の記憶が、心の奥底に一生忘られないものとして刻みこまれることが実に多いのです。その教育的効果は、他のいかなる手段によっても果たすことのできない直感的なものであり、全身全霊的なものなのです。できるだけ多くの、できれば日本全国の若い世代の人々全部に、一年に一度か二度でいいから、すぐれた劇の上演を観る機会を与えてあげたいというのが私の悲願です。

またこれは一部の人たちだけであってもいいし、あるいはある一時期の訓練として行なわれてもいいし、あまり粹をはめる気持はありませんが、演劇は観るだけでなく、つくることも教えたら、青少年の精神教育として、私はどんな修身の授業よりもまさると思っています。情報受容時代に人間疎外的環境にやがては飛込んでゆかなければならない現代の青少年に、なによりも教えておく必要があるのは、ものごとを工夫しつくりだす努力であり、人間同士の血の通いあった連帯の実感であろうと思うからです。芝居づくりほど、自分の思い通りにならない肉体、物質、時間、空間と格闘して、身をもって工夫することを、いやおうなしに教えこまれる仕事は少ないのではないのでしょうか。また、一本の芝居づくりには、それぞれの役割があり、主役もいれば、まったく下づみの裏方仕事も必要であり、参加する全員の意欲と努力がいかに芝居の出来と相関関係があるか、したがって協力して仕事をする連帯感がどれほど大切なものであるか、教師がなにひとつお説教めいた言葉を口にしないで、青少年は芝居づくりによって、おのずから体得するはずで、明治以来の観念教育、知育教育偏重の弊害が、入試その他の諸問題とか

らんで、いまだに容易に解決しないとすれば、これもまた思いきって、芝居づくりを一年に一度位正課にとりこんでみてはいかがでしょうか。ことに地方の学校では国語の時間にさえ実施しにくい、共通語の訓練（アクセントの調整）の機会にも使えるという副次的な効果さえ期待できます。

とうとう最後は我田引水めいた発言になったような気もしますが、客観的な立場で冷静に御検討いただけるならば幸甚です。

（劇団「四季」主宰者）

札幌オリンピック冬季大会の意義と

国民スポーツの振興

オリンピックとアマチュア問題

学校における冬季スポーツの指導

冬季スポーツの振興計画

札幌オリンピック冬季大会と

国際理解の教育

札幌オリンピック冬季大会の概要と特徴

〔現地ルポ〕

——札幌オリンピック大会を迎えるにあたって——

- (1) 施設の特徴 栗本 義彦
- (2) 大会を盛り上げる人々 鈴木 良徳
- (3) 日本選手の努力 丹内 正一
- (4) 学校や市民が大会をどう迎えるか 今井 政夫

高橋 喜敬  
望月 健一

編集後記

◇秋は文化の日を中心として教育・文化に関する行事が全国的に実施されております。文化勲章の授賞、文化功労者の顕彰を始め教育・文化に功勞のあつた人、優良な施設の表彰など各種の行事を催して教育・文化に關して国民の理解と関心を深めようとするものであります。また、最近の経済成長と技術革新の發展により尊い文化財が破壊されるに伴ない人間疎外、公害などの現象が次第に人間の心の豊かさまでも奪いつつあり、芸術・文化の振興こそ失なわれ人間性を回復させるものではないでしようか。

◇本号では芸術・文化を特集し、「青少年と文化」をテーマに青少年にスポーツをあててみました。巻頭では大島先生に青少年と文化について述べていただきました。座談会では青少年と文化活動の現状と展望と題して、現代青少年の気質や悩みと希望、文化活動に何を求めているかなどを話しあつていただきました。また浅利先生を始め諸先生に青少年を中心に論じていただきました。

MEJ 5133 月刊 「文部時報」 11月号 第1133号

著作権所

文 部 省

昭和46年11月5日 印刷  
昭和46年11月10日 発行

発行所 株式会社 帝国地方行政学会  
本社 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
(郵便番号 104)  
(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地  
(郵便番号 162)  
電話 東京(268)2141(代表)  
振替口座東京 161番  
印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定価 80円 (〒20円)  
年間購読料 960円

\* ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。  
\* なお、購読の申し込みは、直接営業所またはよりの書店にお願いします。